

## 子育てが勤労女性にもたらすメリットについて

The Effect of the Life Event (Labor, Childbearing) on Working Women  
-Does Labor or Childbearing Give Many Merits to Working Women?-

鈴木 由美, 石井 貴子

## 要 約

育児から得られるものは、一口ではいえない様々なメリットをもたらすことはいうまでもない。にもかかわらず、これまで子供を持つことの煩雑さなどが強調され、育児をすることが勤労女性に不利であるという結論を述べた資料は多く見られてきた。勤労女性にとって子供を持ち、育てることで様々な負担がかかるためにデメリットであるかのように報告されており、なぜ子供を持たないかということについては様々な理由があることは新聞などでも論議されている。しかし本当にデメリットの方が大きいのだろうか。我々は、勤労女性にとっても人間的な成長に関連した何らかのメリットがあるものと考え調査を行った。

今回の調査では育児経験者の看護職では、育児のメリットとして、対人的な要素について認めていた。対人的な要素のほか、時間の効率の良さ、常識的であることなどのメリットを挙げていた。仕事における自己実現については、育児経験者、未経験者ともに周囲の協力、努力などを挙げていた。また、仕事における評価については育児の経験者は「理解されること」であり、未経験者は「ねぎらうこと」が望ましいと考えていた。そして両立こそ、家庭や仕事に対する愛着を深める要因であることが示唆された。

キーワード：勤労女性，育児，メリット，デメリット

## 緒 言

日本では、合計特殊出生率がついに1.25とますます少子化問題は深刻になる一方で、将来的には超高齢・人口減少社会が懸念されている<sup>1)</sup>。このことは女性の非婚化、晩婚化も一因である。女性が結婚しない自由、出産をしない自由について、価値観の多様化が社会的に容認される傾向が年々強くなり、また女性の労働の目的もこれまでの経済的な目的や余暇時間の活用から、仕事に生きがいを感じる傾向が強くなった。

その背景に高学歴化によって、女性の職業の選択範囲が広がり、一生を通じて従事できる仕事が多くなり、仕事にウエイトを置く生き方も珍しくなくなってきた。特に専門職に従事する女性にとっては、仕事にウエイトを置いた生き方を選択することが予想される。これまでは結婚から始まり、育児および介護に至るまでのライフイベントによって、勤労女性にとって負荷がかかることだけがクローズアップ

されてきたが、メリットについては扱われる機会が少なかった。少子化社会において女性が結婚しない自由が尊重される中で、結婚して出産や育児を経験することは有職、無職および男女を問わず何らかの、そして多くのメリットをもたらすのではないかと考えた。そしてこれは本来、個人の生活上のメリットであるにもかかわらず、親になることで人間的な成長、身体的な成熟をももたらし、同時に仕事、特に対人的な仕事におけるメリットをもたらすものと考えた。日本では子供がいれば殆どが結婚しており、出産は子育ての前提となるものである。このため結婚、出産を経て、子どもをもつことで親子関係以外に、社会生活の土台となる家族も含めた周囲との人間関係の訓練をつむことになり、そのことが対人的な職業、或いは社会における人間関係において好ましく影響するものと考えた。

矢野、羽田野ら<sup>2)</sup>の報告の中でも、年齢や仕事の経験年数ではなく、むしろ職業生活と家庭生活の両方を行っているものの方が、職業コミットメントが

高いことが考えられた。すなわち、家庭生活から得られるものが職業に対する肯定的態度を促進することが推測された。

そこで今回は育児の経験がもたらすメリットに着目した。専門職である看護職に焦点をあて、時間的、物理的、体力的な制約の中で仕事と育児を両立していること、および家族関係の調整などによって充足感を感じているのではないかと仮定し、調査を行ったので報告する。

## 研究目的、方法

目的：専門職に従事する勤労女性の出産、育児の捉え方、特に勤労への好影響について考える。

方法：自己記入式質問用紙を施設に配布を依頼し、留め置き法で2週間後に回収。

調査内容はライフイベント（育児）がもたらすメリットを中心に、育児経験があったらよいと思われるもの、仕事への良い影響、仕事が生活に及ぼす良い影響、育児経験があったらよいと思われる職業、自己実現と育児の経験との関係、社会的な評価などについての質問16項目。

質問内容については心理尺度ファイル、花沢成一「母性心理学」などを参考に育児などのメリットになりうる項目を対人的、対社会的なもの自分自身に関するメリットなどを複数の研究者が検討して形容詞群を抽出し、自由記載欄を設けた。

調査期間：平成17年8月18日～8月31日

対象者：栃木県内のA総合病院に勤務する看護職の女性既婚者、未婚者は問わず194名。子どもの有無に関しては、「いる」91人（46.9%）、「いない」103人（53.1%）であったため、子供の有無を育児経験の有無と考えて比較検討した。

倫理的配慮：個人情報保護にもとづく、プライバシーや個人が特定されないような表記方法を行うこと、回答の自由を尊重し、回答する意思がない問いについては拒否する権利があること、およびそれによる不利益がないことを保障すること、またデータは研究の目的以外には使用されないこと、およびその後速やかに安全な方法で処分されることなどを明記した。

調査結果については、excelに入力し、SPSS11.0 for windowsにて統計処理を行った。クロス集計に関しては、X<sup>2</sup>検定を行い、P<0.05で有意差があるものとして処理した。

## 結果

今回の対象者の属性については以下の通りであった：

既婚95人（49.0%）、未婚87人（44.8%）、結婚暦があるもの8人（4.1%）であった。

年代の内訳は20～25歳51人（26.3%）、26～30歳33人（17.0%）、31～35歳35人（18.0%）、36～40歳25人（12.9%）、41～45歳18人（9.3%）、46～50歳16人（8.2%）、51歳以上15人（7.7%）であった。また臨床経験については3年未満42人（21.6%）、3～5年21人（10.8%）、6～10年46人（23.7%）、10～20年51人（26.3%）、21年以上32人（16.5%）であった。

### 1) 育児経験のメリット

表1 育児の経験があったらよいと思われることについて（複数回答）

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
我慢強くなる*	42	46.2	23	22.3
人の立場を考える*	41	45.1	20	19.4
寛大になれる	29	31.9	21	20.4
自分をコントロールする	22	24.2	15	14.6
気配りができる*	30	33	17	16.5
友人が多くなる*	33	36.3	12	11.7
夫婦の愛情が深まる	30	33	36	35
親の気持ちがわかる	74	81.3	83	80.6
社会に関心がもてる*	34	37.4	15	14.6
社会的に信用を得る	17	18.7	14	13.6
責任感が強くなる*	52	57.1	43	41.7
情緒の安定をもたらす	17	18.7	13	12.6
自信がつく	10	11	12	11.7
視野が広がる*	37	40.7	23	22.3
経済観念がつく	22	24.2	16	15.5
楽しみがある	57	62.6	45	43.7
生活が充実する	24	26.4	33	32
常識的になる	21	23.1	9	8.7
生活に潤いがある	28	30.8	30	29.1
女らしくなる	7	7.7	13	12.6
豊かになる	15	16.5	11	10.7
役割が増える	43	47.3	46	44.7
その他	2	2.2	43	41.7

\*P<0.05

表1が示す中で、子供あり群（育児の経験者）と子供なし群（未経験者）で比較すると、子供あり群のほうが有意に多かった項目として「我慢強い」「人の立場を考える」「友人が多くなる」などの項目が挙げられた。

表2 育児の経験が仕事に良い影響を与えるとすればどのようなことか（複数回答）

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
我慢強くなる*	45	49.5	25	24.3
自信がつく	15	16.5	14	13.6
寛大になる	31	34.1	21	20.4
コントロールができる	24	26.4	14	13.6
ネットワークができる	17	18.7	14	13.6
度胸がつく	13	14.3	17	16.5
強くなれる	43	47.3	45	43.7
情緒が安定する	14	15.4	15	14.6
時間の効率を考える*	51	56	35	34
話題が広い	39	42.9	30	29.1
常識的になる*	23	25.3	11	10.7
経済効率を考える	22	24.2	20	19.4
仕事に意欲的になる	19	20.9	18	17.5
頑張れる*	58	63.7	42	40.8
柔軟性がある	15	16.5	14	13.6
気配りができる	25	27.5	19	18.4
物腰が柔らかくなる	7	7.7	4	3.9
人に優しくなる	33	36.3	40	38.8
折り合いがうまくなる	19	20.9	11	10.7
仕事以外の顔をもてる	37	40.7	27	26.2
その他	2	2.2	4	3.9

\*P&lt;0.05

育児経験がプラスに働くと思われる職業では、看護師128人（66.0%）、助産師130人（67.0%）、保健師103人（53.1%）、医師73人（37.6%）、小学校教諭116人（59.8%）、中学校教諭75人（38.7%）、高校教師63人（32.5%）、大学の教員39人（20.1%）、保育士、幼稚園教諭160人（82.5%）、などであった。その他8人（4.1%）であったが、特に記載はなかった。

## 2) 仕事が育児に及ぼす影響

一方で逆に仕事が育児にどのように好影響を及ぼしているかを質問したところ、表3のような結果となった。経験者と未経験者の間に特に有意差はなかった。

表3 仕事が育児の経験に対してよい影響を与えるとすればどのようなことか

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
広い視野で子育てができる	15	16.5	25	24.3
関心が強すぎない	8	8.8	11	10.7
こだわらない	3	3.3	7	6.8
母親以外の顔がある	22	24.2	27	26.2
時間の使い方が上手	17	18.7	11	10.7
生活にメリハリがつく	13	14.3	16	15.5
頑張ろうという気持ちになる	26	28.6	34	33
その他	3	3.3	4	3.9

総じて勤労と育児などのライフタスクとの関係について質問したところ、表4のようであった。経験者と未経験者に有意差が見られた項目は職場の人間関係へのメリット、対人的な職業におけるのメリットなど対人的なことが関係する要因においてであった。その一方で「個人的なこと」であると考えているのも経験者のほうが有意に多く、デメリットのほうが大きいと回答していたのは未経験者の方が有意に多かった。このことは実際に経験してみると経験者でしか分からないメリットがあり、未経験者は経験したら大変なのではないか、などデメリットに焦点がいつってしまう結果ではないかと考えられる。

表4 勤労と育児の関係について

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
総じて仕事上のメリットがある	19	20.9	30	29.1
昇進、昇給には関係ない	4	4.4	5	4.9
職場の人間関係にメリットがある*	13	14.3	4	3.9
対人的な職業にメリットがある*	19	20.9	12	11.7
個人的で仕事に関係ない*	19	20.9	13	12.6
仕事のメリットにはならない	7	7.7	10	9.7
仕事上デメリットの方が大きい*	8	8.8	28	27.2
その他	2	2.2	0	0

\*P&lt;0.05

## 3) 仕事・自己実現について

ここでの自己実現とは、仕事上の実績やキャリアを積むこと、仕事を生き甲斐とすることなどと予め定義した。

その結果「周囲の協力によって可能」経験者37人（40.7%）、未経験者0人（38.8%）、「努力によって可能」経験者29人（31.9%）、未経験者37人（35.9%）、「両立できることが大切」経験者17人（18.7%）、未経験者17人（16.5%）などの項目について、経験者、未経験者ともに多く回答しており、回答の傾向も似通っており、有意差はみられなかった。周囲の協力とは無関係、自己実現を望まないほうがよいなど、否定的な項目に回答したものは殆どなかった。

また仕事における経験者と未経験者の比較では、最も多かったのは「周囲の協力が大きい」ことであり、「限界がある」「努力を要する」などの順であったが、仕事が負担である」「周囲に気をつかう」などにおいて有意差が見られた。負担であると考えたのは未経験者のほうが多く、気をつかうのは経験者のほうが多かった（表5）。

表5 育児経験がない人との比較

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
(仕事は)負担である*	6	6.6	19	18.4
限界がある	19	20.9	20	19.4
不利である	1	1.1	2	1.9
努力を要する	16	17.6	12	11.7
周囲に気をを使う*	18	19.8	10	9.7
周囲の協力が大きい	30	33	35	34
変わらない	8	8.8	6	5.8
その他	1	1.1	0	0

\* P&lt;0.05

仕事における育児経験の評価については、表6のような結果となった。未経験者においては半数以上が評価されたいことは「両立していること」をあげていた。

表6 仕事において出産・育児の経験が評価されたら良いと思うことについて

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
両立していること*	32	35.2	52	50.5
経験から得たもの	20	22	21	20.4
親としての社会的責任	12	13.2	8	7.8
女性としての役割	8	8.8	5	4.9
人間的な成熟	17	18.7	13	12.6
その他	3	3.3	1	1

\*P&lt;0.05

育児の経験の評価については、未経験群においては半数以上が「両立していること」を選択し、有意に多かった。経験群は両立のほか、経験、人間的な成熟などばらつきがあった。

表7 育児経験の評価について

カテゴリー	経験者	%	未経験者	%
ねぎらいの言葉*	14	15.4	26	25.2
経験を汲んだ役割を	18	19.8	18	17.5
自己評価だけでよい	9	9.9	9	8.7
家族が分かれば良い	5	5.5	5	4.9
子育て終了で無関係	0	0	0	0
仕事には関係ない	3	3.3	2	1.9
職場では評価されない	4	4.4	6	5.8
理解を示されること	38	41.8	34	33
その他	0	0	0	0

\*P&lt;0.05

経験群の半数以上が「理解を示す」と回答しており、一方で未経験群は「ねぎらいの言葉をかける」と回答したものが最も多く、有意差がみられた。

## 考 察

今回の調査では、結婚の有無、出産・育児経験の有無を問わず全ての勤労女性を対象者としたため、育児未経験者からの回答については想像、希望、或いは周囲の観察などから回答したものと推察できる。経験者にとっては自己評価、未経験者にとっては他者評価と解釈することも可能である。

### 1) 出産・育児経験のメリット

概して対人的な項目が選択されていた。友人、社会など子育てをするうえで、周囲のネットワークを築いていく必要性からそれらの項目が選択されたものと思われる。

また未経験群のほうが経験群よりも多かった項目として、有意差はみられないが「夫婦の愛情が深まる」「生活の充実」などであり、理想の家族像ととらえることができる。そして経験群のほうが多く選択した項目は、子供を持ってみて経験するものであった。

概して対人的、社会的な項目についての回答が多く「女らしくなる」「豊かになる」など個人の充足についての項目を選択したものは少ないのは、自分自身だけではなく他者を通しての成長が見られるからだと推察できる。

### 2) 仕事への影響

「時間の効率を考える」「常識的になれる」「頑張れる」など仕事に従事する中で実感できることであり、両立に結びつくものと思われる。逆に仕事育児に与える影響については経験者・未経験者間に類似した項目に回答が集中していた。今回の調査では、経験者の主観的な評価と未経験者が客観的な評価に近いのではないかと考えられる。

また育児の経験がプラスになる職業として、看護職が上位にきたのは、看護職を対象としており、実感する中で肯定的に回答したことが推測できる。しかし全員が看護職であることが回答に偏りを生じさせた可能性は否定できない。しかし今回の対象者は、女性が多い職場で理解がより得られやすい環境にいたることがこのような肯定的な結果を生んだものと考えられる。また教育関係においては大学教員が最も少なく、保育士が最も多かった。保育士は母親に近いところにあるため、このような結果が得られ、また大学の教員に関しては対象学生の年齢が高く、研究職でもあるため出産や育児などがより負担になりやすいことが要因として考えられた。

### 3) 仕事と出産・育児の関係

有意差が見られた項目として「職場の人間関係にメリットがある」と回答したものが多かった。概して育児の経験は私生活のことではあるが、家族が増えること、それに伴うネットワークや周囲の協力などが必須となるため、人間関係の調整について鍛錬される機会があることも要因であると推察できる。

一方で未経験者では「仕事上のデメリットのほうが大きい」と回答しているものが最も多く、有意差がみられた。子育てを否定的に捉えるのは先行研究に近い結果である。

#### 4) 仕事での自己実現

自己実現を仕事で図ることにおいては、経験者群においては未経験者群に比して多くの調整を必要とする。自分が仕事のために使える時間、経済的な問題など、周囲の協力することながら本人の努力や労力を必要とし、この負担のために昇進、昇格などを望まないことなどが推察される。双方ともに「周囲の協力」を一番多く挙げていた。仕事にウエイトを置いた生き方、自己実現の欲求のある女性の視点では、子育ては負担、不利という印象を与える結果だと思われる。

しかしこども未来財団委託研究「仕事と家庭の両立支援に関する研究」<sup>3)</sup>では子育てのキャリア形成への影響は一時期のものであり、その後のキャリア形成への影響は小さいと考えているものが6割であったことなどを踏まえると、育児と仕事の両立の負担などは、むしろ別の面での自己成長につながると解釈することもできる。

看護職の場合は業務経験が優遇される制度があることが多く、出産・育児がキャリア形成にマイナス因子を及ぼす可能性が小さいのではないかと考える。従って自己実現についても出産・育児の時期と並行しながら何らかの形で可能なのではないだろうか。

#### 5) 育児の経験があることへの評価

大日向<sup>4)</sup>は三歳児神話は女性の人生に立ちだかる障壁として機能不全を起こさざるを得ないとし、仕事と育児の両立支援は今日の緊要課題であるとしている。国立社会保障人口問題研究所長の阿藤<sup>5)</sup>も政府ができることには限りがあるため、企業社会がファミリーフレンドリーな方向に変化し、男女平等の価値観が浸透し、男性の家事・育児参加が当たり前になるなどの変化がないと少子化問題の解決は容易ではないと述べている。

今回の調査でも経験群・未経験群ともに「両立」をもっとも多く支持しており「経験から得たもの」

「人間的な成熟」などの順で多かった。このことは矢野、羽田野ら<sup>6)</sup>の報告にもあるように、家庭生活と仕事のバランスがうまくとれているほど仕事に対する愛着や価値意識が高く、生き甲斐館や精神的充実感も高いということを裏付けている。多重役割による達成感も大きなものと思われる。

今回の調査で子供を持つことはマイナスイメージだけではないことは、経験者の回答などから得られたと思われる。湯澤も<sup>6)</sup>「子をもち養育することは経済的にも、労力的にも時間的にも大きな負担ではあるが、同時にその自己犠牲は、子をもたない人間では経験できない豊かな人間性を形成する」と述べており、子をもつことの利点は、具体的にはにぎやかな共生感情を充足し、夫婦だけではとらえない家庭的情緒を生み、弱小なものを庇護したいという親らしい感情を満たし、未完成の若々しい力の存在を実感し、異世代との社会交渉で社会関係が拡大され、更には老後のよき話し相手や親身の世話が期待できるといったことがあげられている。

育児経験は日本では多くの場合結婚が先行し、夫やその親や同朋との関わりが生じ、新たなる自己調整が必要となり、年齢を問わずその人なりの成熟などをもたらすと考えられる。

育児の経験をする中で年齢を重ねることから人生経験を積むことになり、直接的に昇進、昇格などをもちたすものではないが、勤労女性にとって表面には出ない生活の潤いなどから豊かになり、充足感を感じる事が明日の活力になるのではないだろうか。

## 結 論

1. 出産・育児経験者の看護職では、育児のメリットとして、対人的な要素について認めていた。
2. 仕事における自己実現については、経験者、未経験者ともに周囲の協力、努力などを挙げていた。
3. 育児経験が評価されたいことは、経験者は「理解されること」であり、未経験者は「ねぎらうこと」が望ましいと考えていた。

## 終わりに

今回の調査に用いた質問項目については、信頼性が認められた尺度がないため、今後開発の余地があり、それが今回の研究の限界となった。

最後にこの調査にご協力くださいました栃木県のA病院の看護部長、及び看護職の皆様には深謝いたします。

## 引用文献

- 1) 日本婦人団体連合会編, 女性白書～世界の流れと日本の女性, ほるぷ出版, 28-33, 2004.
- 2) 矢野紀子, 羽田野花美, 女性看護師の組織コミットメントと職業コミットメント, 既婚・未婚による違い, 第35回日本看護学会誌, 看護管理, 173-175, 2004.
- 3) ニッセイ基礎研究所, データで見る少子化ペリネイタルケア18-2, 1999.
- 4) 大日向雅美, 三歳児神話とはなにか, 助産婦雑誌vol.55, No.9, 12-13, 2001.
- 5) 阿藤誠, わが国の少子化の現状と課題, ナースアイ, vol.18, No.1, 8-15, 2005.
- 6) 羽田野花美, 矢野紀子ら, 子育て期にある女性看護師の仕事および家庭生活と心理的Well-being, 職業コミットメントとの関連, 第24回日本看護科額学会学術集会講演集, 2004.
- 7) 湯沢雍彦著, 稲垣長典ら, 監修, お茶の水女子大学, 家政学講座, 家族関係学, 光生館 71, 1969.

## The Effect of the Life Event (Labor, Childbearing) on Working Women -Does Labor or Childbearing Give Many Merits to Working Women?-

Yumi Suzuki, Takako Ishi

### Abstract

It is generally accepted that the child care may brings various advantages to the women, but there is a lot of documents which described a conclusion that child care has some disadvantages for working women. And the disadvantage is reported as a reason for childless in the newspaper etc. However, are the disadvantages really larger than the advantages for the working women? We thought that there were advantages related to human growth for the working women, therefore we investigated the advantage of labor or childbearing.

Both experienced & inexperienced people in child care cited cooperation & effort in work self-actualization. Moreover, the person experienced in child care enumerated "understanding" in work evaluation, while the inexperienced preferred "appreciation". Therefore co-existence was suggested to be a factor to deepen the attachment to the home and work.

Keywords: Working women, Child care, Merits, Demerit